美 術 科 課 題 プ リ ン ト

〇教科書を見ながら(　　)の中にあてはまることばを入れていきましょう。

伝統の美に学ぶ　教科書Ｐ４８，４９

京都の町衆と呼ばれる富裕な町人階級から生まれた「琳派」は、桃山時代後期の本阿弥光悦、俵屋宗達に始まり、江戸時代初期に尾形光琳・乾山へと発展しました。江戸時代後期になると、その中心は江戸に移り、酒井抱一らが活躍しました。後に光琳の名から(　　)と名付けられ、その大胆な構成や技法は、現代でも画家やデザイナーなどに大きな影響を与えています。

☆(　　)図屏風　　俵屋宗達　紙本金地着色　二曲一双屏風　建仁寺　京都

宗達の独自性は、大きく中心をあけた構図が宇宙的な広がりを感じさせること、従来、青と赤で表現されてきた風神雷神を白と緑にして金地と組み合わせた色彩感覚、たらし込みによる雲の表現、神々の動きや表情の生き生きとした躍動感など卓越したものである。本作は１７世紀前半に活躍した宗達の晩年の作と推測されているが描かれた当時に大きく取り上げられることはなかったようである。

教科書Ｐ５０

（　　)は、鎌倉時代に水墨画とともに流行し、その後、茶の湯の文化とともに武士や貴族の暮らしに取り入れられて以来「和のしつらえ」として、私たちの生活に溶け込んできました。

☆(　　)　　菱田春草　　絹本着色　　１９１０年

紅葉した柏の葉と、幹にはじっとこちらを見つめる黒猫。画面の裏にも顔料を塗る裏彩色の方法を使って、秋に美しく輝く柏の葉を描いている。

教科書Ｐ４６，４７

☆(　　)図　　長谷川久蔵　　壁貼付　　紙本金地着色　　智積院　　京都

長谷川等伯の息子、久蔵の作とされる。重なるように二株の桜が描かれ、背後のものはしだれ桜である。手前の桜は幹も太く、花はたっぷりと正面を向いて装飾的に描かれている。他にも、たんぽぽ、すみれなどの花が見られ、春爛漫の世界を表している。桜の花が白色絵の具である胡粉をふっくらと盛り上げ、咲き誇る桜の花の豪華さを描き出している。

☆(　　)図　　長谷川等伯　　壁貼付　　紙本金地着色　　智積院　　京都

中央に巨大な楓の樹木を斜めに置き、左右に枝を広げる構図は力強さとともに画面に動きを感じさせる。金地の空間に群青で流水を配し、手前には秋の花々を配置する。豪華ではあるが、楓の葉の色づかいなどに繊細さが感じられ、等伯の実力の高さを示す傑作である。

モノトーンの美しさ　　教科書Ｐ４４、４５

(　　)は、中国に始まり、日本に伝わりました。そこには墨と水だけで奥行きや広がりを感じさせる独特な世界が表現されています。

☆(　　)鳴鵙図　　宮本武蔵　　紙本墨画　　１７世紀

二刀流の剣豪で知られる宮本武蔵は、書画にもすぐれた作品を残している。１羽の鵙(もず)が枯れ木に止まって、登ってくる芋虫の様子をうかがっている。余白が大きくとられ、画面の中心を貫く一本の枯れ枝に見る者の視点が集中する。素早く無駄のない筆さばきや濃淡のコントロールで、緊迫した場面の臨場感とともに、作者の死生観など深い精神性が感じられる。

☆(　　)山水図・冬景図　　雪舟等楊　　１５～１６世紀　　室町時代

雪におおわれた断崖が中央にそびえ、船から下りた人が楼閣に向かって歩んでいる。中央の力強い輪郭線と冬枯れの樹木が厳しい冬の寒さを感じさせる。雪舟は１４６８年に明に渡り、中国水墨画の研鑽(けんさん)を積んで、約２年後に帰国した。「秋冬山水図」は、帰国後に研究の成果をもとに雪舟独自の工夫を昇華させた代表作である。

☆(　　)図屏風　　長谷川等伯　　紙本墨画　　六曲一双屏風　　１６世紀安土桃山時代

両隻とも深い霧の中に浮かぶ松林を描いている。左隻右上には遠くに雪山がうっすらと見える。墨の濃淡と筆運びだけで、見る者をもやに包まれた松林の湿気やにおいを感じとらせるような静寂の中へ誘い込む。このような遠近感や空間の表現は同時代の作品にないものである。制作時期に息子の長谷川久蔵がなくなっており、見る者の感性に鋭く働きかける画面は等伯の強い心象の表現からもたらされたと考えることができる。

日本の屏風や掛軸などを鑑賞して、どんな印象をもちましたか？感想を書いてみよう。

時間があったら挑戦してみよう。

「身のまわりのものを描こう」　文具やペットボトル、植物などの中からひとつ選んで描いてみよう。紙は家にある紙でもノートでも OK